

崎知子

平安朝女流作家の研究

法蔵館刊



昭和42年8月1日 初版発行

¥ 2000

著 作 者	岡 崎 知 子
発 行 者	西 村 七 兵 衛
印 刷 所	内外印刷株式会社
発 行 所	法 藏 館

京都市下京区正面烏丸東
振替 京 都 2743 番
電話 0458・7351 番

© Printed in Japan

はし が き

一、日本文学史上、平安朝時代ほど、女流作家の活躍した時代はありません。私は大谷大学文学部の卒業論文に赤染衛門を取り扱い、同大学院の修士論文に和泉式部を取りあげました。その頃から、もうすこし広く、平安朝の女流作家を研究の対象にすることにし、伊勢・大斎院選子などについての小論文を雑誌などに発表も致してまいりました。さて昨年の暮に、指導教授から、従来の研究を土台にして、なるべく広い立場で研究をまとめてはどうか、と言われましたので、おうけなきこととは思いながら、微力を尽してみようと、ひそかに決意したことでありました。

一、今年の正月、大阪府池田市に居る次兄のところへ年始の挨拶に行きましたが、そこで突然発熱して臥床してしまいました。病気は、実は三、四ヶ月前から、ひそかに予感し危惧していたものが現実になってきたのでありました。私はそのまま次兄の世話になって池田病院に入り、次いで阪大病院に移り、また池田病院に還って治療を受け、六月の末に、ようやく退院してもよろしいと告げられました。しかし独身の私は退院しては静養ができませんので、当分池田病院に置いてもらうことにしましたが、八月中旬に至って、あまりの暑さに堪えかねて、生家である小樽の長兄のもとに帰りました。北海道のさわやかな空気はまことに快く、熟睡もでき、

食欲も出て来ました。この調子なら、九月の末には上洛して、研究に全力を注ぐこともできようと喜び勇みました。しかるに九月中旬から再び健康を害して当地の病院に入りました。しかも病状は漸次悪化しているらしく、日夜痛苦に呻吟するようになって、既に一ヶ月余になりました。

一、平安朝女流作家の研究というような題で起草しようと思っていた夢は、遠く雲霞の彼方に消えてしまっておりましたところへ、大谷大学の国文学研究室から、今までに発表した論文をまとめて一冊にしてはどうか、という相談を受けました。これは私の全く考えていなかったことなのですが、仮に、そのようなものを出そうといたしますと、編集も校正も、すべて研究室の方々——特に、多年親しくしていただきました大谷大学講師渡辺貞麿氏・同片岡了氏——のお世話にならなければなりません。蕪雑な小論を顧みますと、一冊の書物としてまとめたていただくほどの価値があらうとは思われません。しかも心の底には——あつかましいとは思いますが——御好意に甘えたいような気持が、全く無いとも言いきれません。この上は、多年御指導をいただいてきました多屋先生の御判断におまかせ申し上げたいと存じます。

昭和四十一年の暮に

岡崎 知子

(妹、岡崎元子代筆)

目 次

は し が き 一

平安朝女性の物語 七

伊勢伝考 四

I 宮仕時代 中心に 四

伊勢 六

し 八

究 一一

大斎院選子にける神と仏 一五

和泉式部と性上人 一七

和泉式部の宗教的心情について……………一五

赤染衛門伝の輪廓……………三三

釈教歌考……………三七

—八代集を中心に—

「思女集」と「相模集」……………三七

「枕冊子」にみえる藤原齊信……………二六

「平安朝女流作家の研究」の後に……………多屋頼俊…三〇五

論文目録・略歴

平安朝女性の物語

はじめに

「かげろふ日記」、「枕草子」、「更級日記」などをはじめ平安朝女流文学にしばしばあらわれる「物語」について、当時の女性たちの物語のしかた、その目的、意義などを考察してみたいと思う。

「かげろふ日記」における道綱母の初瀬詣や石山詣については一般によく知られているが、そのほか賀茂、西山の寺（鳴滝の般若寺かといわれている）清水、稲荷等への参詣もあって、「かげろふ日記」の物語の条はこの作品の中でもかなり重要な部分といえるようである。また清少納言の「枕草子」（古典文学大系本。以下同）では一一四、二二八段、一本二八段等の初瀬詣、一二〇（ただし伝能因所持本は初瀬）、二二九、二四一、二五六段等の清水詣、一五八段の稲荷、二二六段の賀茂、二二七段の太秦詣など、物語に関する章段はかなり多い。さらに「更級日記」においても孝標女は初瀬、石山、鞍馬、太秦等に各二度ずつ詣でているほか、清水、霊山などにも詣でている。また「赤染衛門集」、「和泉式部集（正・統）」、「相模集」等の私家集の中にも物語に関する詞書がすくなくない。

こうしてみると物語はこの時代の女性たちにとってかなり重要な関心事であったことが知られる。しかしなが

らその割にこの物詣の意義については従来ほとんど考察せられていないように思う。なぜ物詣をするのか、何のためにやるばる初瀬や石山にまで出かけて行くのか、という疑問は、また彼女たちが物詣をいかに考え、これに何を期待したのかという問題につながってゆく。この、物詣の意義——物詣という行為をささえている根本的な考え方——について考察することは、平安朝女性の精神生活を知る上に重要な事柄であるとともに、当時の仏教のあり方や神仏に対する考え方の一面を知る上にも役立つと思う。

一 物詣の実態

物詣がかみほとけに詣でること、つまり寺社に参詣することであるのは今更いうまでもない。平安朝女性がおもにどこへ詣でたかということを知るため、前掲の女流日記や随筆、そのほか私家集等を通じて、詣で先の判明している場合のみを取上げ、これを整理してみると、管見の及ぶ範囲ではだいたい次のようになる。もっともこのほか「物に詣でて」とか、「ある所に詣づるに」とかいうふうに、詣で先の判明しない記述も多いのであるから、そういう場合も計算に入れると、この時代の女性たちはかなりよく物詣をしたということが知られる。因みに、ここに事例を拾集した時代はおよそ村上天皇の応和の頃から後三条天皇の延久の頃に及んでいる。⁽¹⁾

詣で先	詣で人	年時または季節	出典	備考
初瀬	道綱母	安和元年九月 天禄二年七月	かげろふ日記	一夜参籠。 一夜参籠、父倫寧同行。 ふかをき川を詠む。
〃	赤染衛門	正月子日	〃	奈良に泊る。
〃	〃	秋(長和元年か)	〃	夫匡衡の没後。
〃	〃	秋	〃	人(章信女)に見せんと紅葉を苞に折る。 老後。
〃	清少納言	四月晦方	枕草子 二二段	淀の渡りの風景描写。五月三日帰京。
〃	〃	九月二十日余り	同 二二八段	はかなき小家に宿り、夜更けの月を見る。 局して詣づ。(界本は「ねたきもの」の条)
〃	相模	十月	同 一本二八段	
〃	孝標女	永承元年七月廿五日	相模集	三日参籠。
〃	〃	〃	更級日記	三日参籠。
(孝標女の代) (参の法師)	道綱母	(長元五年から同 八年までの間)	(〃)	(母一尺の鏡を鑄させて、えみて参 らぬ代りにとて僧を出だし立つ。)
石山	赤染衛門	天禄元年七月末	かげろふ日記	三日参籠。 徒歩詣。
〃	〃	秋	赤染衛門集	一夜参籠。
〃	〃	長和元年頃か	〃	夫匡衡の没後。
〃	〃	二月	〃	石山の涅槃会に禅林寺僧正尋覚に歌を贈る。
〃	和泉式部	春	和泉式部集	帰途粟田山に泊る。

馬	鞍	法	輪
赤染衛門	御形宣旨	和泉式部	紫式部
十月廿日	二月ばかり	初夏	初夏
天祿三年四月祭の頃	天延元年十一月	もしくは二年正月	もしくは二年正月
赤染衛門集	和泉式部集	紫式部集	枕草子 三六段
赤染衛門集	御形宣旨集	赤染衛門集	参籠。
一条摂政藤原伊尹と詣であう。	本文に錯簡もしくは竄入があるらしく、歌中に春とあるところからすると天延二年正月の事と思われる。	参籠。	参籠。
弘法僧を聞く。	ころもの滝を詠む。	貴船にも奉幣す。	貴船にも奉幣す。

六波羅密寺	相模	四月葵祭の翌日	相模集	説経聞きに詣づ。
東大寺	孝標女		更級日記	初瀬詣の途中立寄る。
靈山	〃	万寿元年か二年	〃	匡衡の任国尾張に下向し、翌年詣づ。
熱田宮	赤染衛門	長保四年春	赤染衛門集	尾張農民の擾乱平定を祈る。
増田宮	〃	長保四年か	〃	眼病平癒を祈る。
日向寺 (日向の靈山)	相模		相模集	百首歌献納。
箱根権現	〃	治安三年か	〃	道長同行。赤染衛門御供に参る。「御堂関白記」
石清水八幡	道長室倫子	寛仁元年九月	赤染衛門集	・「栄華物語」(木綿四手)。

右の諸例は女流日記、随筆、私家集等を材料としており、従つておもにこれらの作者である受領層の女性を対象として考察することになるわけである。このほかに「栄華物語」等に女院の石山詣や、住吉・石清水・天王寺行啓の例が若干みえるが、⁽²⁾参詣者自身の記述ではないので参考までにとどめる。

二 物詣の目的

さて、女流の作品の中からもかくこれだけの物詣に関する材料が集まったということは、この当時の女性たちの物詣に対する関心のほどを示すものであると同時に、物詣の持つ意義が閑却できないものであることを物語っていると思う。

彼女たちはいったい何のために、どういう目的でこのように、これらの寺社に詣でたのであろうか。中でも初瀬や石山のごとき遠方まで出かけてゆくことは、当時の女性にとってかなり困難な事であったはずである。「初瀬には、あな恐ろし。奈良坂にて人にとられなばいかがせむ。石山、関山越えていとおそろし。鞍馬はさる山。ゐて出でむ、いと恐ろしや」といった孝標女の母の言葉は、当時の女性の物詣の困難さをよく物語っていると思う。それにもかかわらず上掲の表によると、女流のほとんどは初瀬あるいは石山に詣でている。いったいそれらは純粹な信仰から思い立たれたものなのか、それとも単なる物見遊山の気持からか、あるいは物思いのつれづれを紛らすためのものか。こうした疑問についてまず作品自体の中からはどれだけの答が得られるのであろうか。こころみに「かげろふ日記」の初瀬詣の場合を考察してみよう。

……しのびて思ひたちて、日あしければ門出ばかり法性寺のへにして暁より出で立ちて午どきばかりに宇治の院にいたりつく。見やれば木の間より水の面つややかにていとあはれなる心ちす。

（岩波古典文学大系本。以下同）

安和元年九月（九日）のころ、朝早く法性寺のあたりを出発して昼ごろ宇治院についた作者は目立たぬようにと供人の数も少くしたことにについて「我ならぬ人（兼家の正室時姫）」の場合を思いくらべたりする。宇治川の網代や往き来の船どもを眺めて、「見ざりしことなればすべてあはれにをかし」と述べ、車のしりに歩み疲れた下衆どもが、できの悪い柚や梨を美味そうにかじる姿にあわれをもよおしている。宇治では舟に車をかきすえて川を渡り、顰野の池をすぎて泉川の橋寺に泊まる。旅籠所から出された切大根（きりおほね）に旅情をそそられ、泉川を渡って「よもの物がたりの家」などを思い出しつつそのあくる日は棒市に泊まり、そこで京都からの兼家の消息を受け